

## 書評 「稲作の起源：イネ学から考古学への挑戦 池橋宏著」

講談社選書メチェ 2005年 講談社 ISBN4-06-258350-X

### はじめに

表題から期待されるのは、稲作とそれをとりまく文化・文明要素がどのように成立してきたかの過程や要因への新しい視点からの説明である。278ページのすべてを読んでも、あらたな視点と明快な解答は読み取れなかった。それだけでなく、事実と反する記述など、根拠と説明内容に多くの疑問があり、期待はずれであった。文献古代史や考古学の記述はさしおいて農業植物学的側面について、その概要を考証してみたい。

### 照葉樹林文化論の着想と深化

本書は、これまでの稲作の起源に関する学説（仮説や枠組み）に対する疑問から始まって、C. O. Sauer (1952) (サウアー 1981) の説に追随するかたちで、淡水漁労と一体化した多年生イネの株分けによる園芸的栽植によって稲作が始まると結論しているようである。そのなかで、照葉樹林文化論の初期の著作内容を度重ねて批判（非難）している。照葉樹林文化論は、初期の記述を補完・展開する形で徐々に組み上げられたものであるが、論の提唱者である中尾佐助がこの本を読んだとしたら、「困ったものだね、君」といってニヤッと笑ったであろう。「一つの説がいつまでも変わらないと思うのは間違いだよ、科学はつねに塗り替えられて真実に近づく」というのはかねがね中尾の口癖であった。本書の著者も引用している『栽培植物の世界』（中尾 1976）のあとがきには「学問と知識の世界は、はじめからなんらかの意味で誤りのあるものを積みあげ、修正に修正を重ねて、だんだんいいものに仕上げてきた歴史の上に成り立っているのだ。……それが出来ない人は停止してしまった人というべきだろう。」とも書いている。それからすると、照葉樹林（農耕）文化論の初期の組み立てにおける稲作という一つの要素の扱いを持ち出して疑問を呈したとしても、後の枠組に優る説明がなければ、的を射た指摘にはならない。中尾（個人）は、本書で指摘されるように照葉樹林文化における稲作の位置づけだけでなく、照葉樹林農耕と根栽農耕の関係性についても、後には初期の枠組みを改めている。その意味では、本書で頻繁に引用される『栽培植物と農耕の起源』（中尾 1966）と「農業起原論」（中尾 1967）での仮説設定と「前説撤回」として非難される修正とを当然と考えるか、「理論であるからには、それを基礎として多

様な現象が無理なくみちびかれるような、核となる部分がなければならぬはずである」と本書（64ページ）が指摘するように理論から導き出される普遍性が永遠に続くべきと考えるかについては、中尾は本書の著者とは全く異なった発想をしていたのである。たぶん中尾が生きていたら（本書の著者はこの本を公表はしなかつたらうが）、中尾（個人）は、これまでの書評や論文コメントと同様に（中尾 2005）、本書での考え違いや誤りを指摘して批判を一蹴したか、説得力のある反証論文を公表したであらう。

中尾（個人）がイネ（栽培イネ）に限らず農業用の植物について持っていた興味の原点は、タネから胃袋までの過程における植物とヒトとの関わりの歴史の変遷とともに、栽培種と野生種の生物学的・生態学的違い、すなわち野生種から栽培種への進化過程（栽培化）であった。一連の半栽培に関する論考（中尾 1977a,b, 1981 など）はそれを示している。インドやアフリカでみられるシード・ピーターによる野生イネ科植物の穀粒の採集から、寄せ穂、未熟刈り、穂刈り、株刈り、叩き付け脱穀、踏みつけ脱穀という収穫技術の進展にともなう種子の非脱粒性の進化や、収穫部位の同熟性と収穫の効率化を伴った多年生から一年生への変化、芒や保護組織の退化、種子休眠性の欠失など、種子農業のもとで進化してくる植物の特徴（栽培化症候群）を念頭において、人間の作り上げる作物とヒトとの相互の関係性の変化のプロセスを一般化することにあつた。半栽培の段階での栽培化の進行については、種子作物だけでなく、栄養繁殖する作物でも根栽でも野菜（木菜）でも考証している。栽培イネと稲作の起源は、その一般化に関わる一要素である。

### イネ学からの論点

最先端の「イネ学」からの視点を強調する本書（カバー）では、残念なことに、イネに関する植物学的背景や栽培化については、イネ進化学者の見解の断片を引用しただけで、納得のゆく著者オリジナルの説明はほとんど述べられていない。現在の稲作技術理論を反映した、作物学者には解りやすい遺伝生理学的あるいは栽培学的な便宜的な機能論的解釈はあるが、進化生物学的あるいは生態学的論証の鋭さにはまったく欠けている。たとえば、栽培種の遺伝変異維持機構について、自殖（自家受精）によって（イ

ネは) 固定する(単純で純血になる)ので株分け栄養繁殖による個体のほうが、遺伝的潜在力が高いという説明(111ページ、第4章事項註1)は、育種家の書いた文章としては、首を傾げたくなる。自家受精で種子繁殖するか株分けの栄養繁殖であるかは集団の遺伝的多様性とは関連のない話である。とくに複数の小集団(水田や畑など圃場の一筆づつ)の集まりをもつイネ(野生イネ)のようなメタ個体群では、絶滅と再住み付き(extinction and recolonization: 栽培条件下では収穫と播種または植え付けにあたる)があり、自殖が永遠に続いたとしても、異なった遺伝子座に関して異なった対立遺伝子のホモ接合となる多様な個体が存在できる。遺伝的多様性を新品種の展開や分布拡大の前提条件とするなら、栄養繁殖の多年生でなくても適応的進化を保障する遺伝的多様性は維持できるのである。著者が本書での説明を信じているとするなら、交雑育種法の理論的背景が解っていないことになる。交雑育種法の一つである集団育種法においては、品種間交雑、混合採種の繰り返しの後、6~7代目あたりから始める選抜をしなければ、後代の集団はいつまでも両親のもっていた遺伝的多様性をなくさないからである(松尾 1974)。

インディカイネの成立については、ジャポニカイネとインディカの野生イネとの雑種説を持ち出している(167ページ)。この主張の前提となる野生イネにおけるインディカ型とジャポニカ型の分化については何も説明していないうえ、アッサムでのイネ品種の多様性について株分けで維持管理された栽培イネの集団の周りに自生の野生イネが群落をなして存在し、浸透性交雑が進んだ結果として、核と細胞質の遺伝的組み合わせにおける多型が成立している。イネおよび野生イネの花粉飛散能力を考えると、図に示すような核置換に至るまで浸透性交雑がすすむには種子作物として栽培されるイネ品種に近接した位置にイネ品種の開花と同時に花粉飛散する野生イネが大量に必要となる。株分け繁殖で種子をとるために栽培しているイネの一部に野生イネの花粉がかかって雑種第1代が出来て育ったとして、その周辺に作られているイネは栽培品種である。雑種個体にふりそそぐ花粉は栽培種のものも多く、野生イネの花粉が栽培種の花粉より早く雑種の柱頭にかかる確率は極めて低い。図に示された浸透性交雑は、逆の例でなければ起こりにくいことになる。インド型の野生イネの中にジャポニカイネが侵入したときに、出来た雑種第1代個体の生命力が高く、花粉稔性が低い場合には浸透性交雑が起こり易いが、その時は、核の遺伝子は野生型の特徴を持つので、野生イネの中にジャポニカ型の細胞質が混在することに

なる。107ページから113ページにある原始苗代での生態的シナリオは、起こりにくいことが幾重も重ならないと成り立たないが、著者はインディカとジャポニカの交雑親和性の方向性や両者にみられる部分不稔という隔離機構の役割(インディカとジャポニカの分化が野生イネで起こったか栽培イネで起こったかは別として)を否定している(インディカとジャポニカを異種に見合う群とは認定していない)から、この場合、原義(Anderson 1949)に沿った浸透性交雑は進まず、説明をますます困難としている。

インディカ型(イネ)とジャポニカ型(イネ)に対応してみられる葉緑体DNAの塩基配列の違いが栽培化されたイネの中で起こったか、野生イネの中で起こったか、核の進化と葉緑体の進化がインディカとジャポニカの分化に対応して同じように進んだか、それに交雑不親和性がどのように関わったかは、まだ解っていない。著者のいう浸透性交雑によるインディカの成立は、細胞質の多型がもとにあったとすると、説明の体をなさなくなる。少数のDNAマーカーによるインディカとジャポニカの判定のようなパターン解析の結果を使った説明は、あたかも問題を解決したようにみえ、素人にはわかってもらいやすい。とくに説明の難しい集団の問題を個体の原理で説明すると、素人にはわかりやすくなる。著者が袋小路とする優性遺伝子から劣性遺伝子へと変わる変異の方向性の説明も近代遺伝学の常識からみると時代遅れで、塩基置換に基づく突然変異であれば、可逆的に変化できる。本書には、個と集団の原理を識別しただけでなく、古典的な原理に基づく都合の良い子供だましの説明が至る所にみられる。カバーにうたうイネ学最先端にはほど遠さを感じてしまう。

### 野生イネの生態環境

初期の稲作における沼沢地での直播栽培の困難についても自然あるいは半自然の植物の振る舞いは考慮されていない。野生イネの生育する浅い沼沢地をみると、一年生であるか多年生であるかにかかわらず、野生イネは空いた水面のみられる水域にみられる。水辺に自生するマコモ *Zizania latifolia* も、葦原も不思議なことに水辺の植物は純群落をつくる(109ページに述べられている上海など中国江南でのマコモ田の移植栽培は、艾白=ジャオパイという野菜にするマコモタケのためであり、マコモの種子を利用して古代に株分け栽培をしていたかどうかは、アメリカネイティブの使うアメリカマコモ(ワイルドライス) *Zizania aquatica* の利用実態を見る限り疑わしい)。水位が変動するダムやため池の水際

の斜面には雑草も灌木も生えないことからわかるように、水辺や水際の生態系には純群落をつくる競争力の弱い植物が生えやすい。野生イネはそのような植物の一つである。現代の直播水田にみられる雑草は、浅水乾田の条件の中で埋土種子(シードバンク)を形成しているグループであり、水位の変動には極めて弱い。直播水田での雑草の繁茂と自然または自然に近い沼沢地の植物の生態を同一視して、栽培化現象が進むと想定される初期の水稻栽培での直播を難しいと機能論的に主張するあたり(本書42ページ)は、時空間および生態学的な視点に欠けた論考である。イネという植物について栽培化の前の出来事と栽培化された後の出来事かが識別されずに書かれた論述は説得力に欠けている。

### イネの栽培化

東アジアの農耕文化における稲作文化あるいは稲作農耕の位置づけについては、堀田(2004)も佐々木(2006)も指摘するように中尾佐助(個人)は最終的な答えは出していない。イネの原産地を当初のインドから雲南省へ修正した中尾(個人)の見解は当時の遺伝学的研究がVavilovの遺伝子中心説に沿って出した結論の一つ(中川原1985)に基づいており、考古学的事実に基づいて展開された長江下流の栽培イネ起源説(佐藤1996, 1999)があれば、中尾はそれに基づく説明をしたか、インドと中国起源の二元説をとったであろう。核と細胞質の塩基配列情報に基づく近代集団遺伝学的解析によれば、イネはインドと中国で独立して(インディカとジャポニカに対応して)野生イネから栽培化したという(Londo et al. 2006)。その栽培種と野生種の違いは、ふつう種子の脱粒性と種子休眠性のあるなしで識別される。本書ではイネの栽培化に関してもっとも重要な非脱粒性(種子の休眠性は連動している)の進化を議論していない。現代的な分析によればイネの脱粒性は別々の染色体に乗った4種類の遺伝子によって決まっている(Cai and Morishima 2000, Lin et al. 2006など)。これらの遺伝子の集団遺伝学的な振る舞いが解れば、栽培イネの起源はより明瞭になる。

本書が言うように株分け移植栽培が古代越族(泰族)によって始まり、アジア各地に拡散したとしても、非脱粒あるいは難脱粒の性質が進化しなければ、稲作は効率の悪い農耕に過ぎない。多年生の特徴を持つだけ、植物は繁殖効率(reproductive effort, 作物学でいう収穫係数)を低くし、種子への投資が悪くなるのは植物の本性である。サウアー(1981)のいうようにイネの移植栽培に多年生栄養繁殖植物への知識がともなっていたとしても、食べ

る対象でない植物器官を殖やすこと(株分け繁殖)が収量に結びつくという認識をもつには、原初段階では難しい話である。稲作農耕の発展過程については、非脱粒性のような栽培化に関わる直接的な特徴の進化が解明されない以上、解答を出せる問題ではない。

### 中尾論文の引用と解釈

イネの栽培化の時期をどう説明するかは別として、古代越族を稲作の担い手と想定し、株分けによる園芸的植栽という農法が稲作の原点であるとする仮説からは、稲作の歴史にいくつかの新たな視点も見えてくる。しかし、引用される事実や観察のエビデンスは非常に曖昧である上、事実に基づかない記述や原書とは違った引用文が散見される。本書では中尾佐助のどの著書かを特定せずに文章を引用しているため、事実確認を極めて難しくしている。中尾佐助個人の経験についても「中尾の踏査の範囲は、オセアニアの一部、北中国、インドおよびアフリカと世界を広くおおっているが、実は華南からインドシナ半島はほとんどみのがされている。」(本書61ページ)のように意図的な情報操作か事実誤認がある(岩波新書の出版される頃には経験がなかったとは書いていない)。中尾個人が経験したことのないとする本書のフィールド調査の対象地である中国南部、雲南、タイ(チェンマイを含む)、マレー半島には、中尾佐助は大阪府立大学を定年するころ出かけている。それを受けて中尾はこれまでの枠組みに関連するいくつかの要素を論考している。「東南アジア農耕文化試論」(中尾1980)と「タローイモの起原と文化」(中尾1981)、「パプアニューギニアにおける半栽培植物群について」(中尾1982)などである。「タローイモの起原と文化」は本書の著者も所属する日本育種学会のシンポジウムの収録であり、チェンマイ近郊での調査と中国杭州での観察を記述した文章がある。本書の著者が検証しているのと同様の要素については、このほかのいくつかの論文でそれなりの論考を加えている。本書で議論している疑問点のほとんどは、後世の中尾のなかではすでに解決済みであったのである(中尾1983など)。

本書は、照葉樹林文化論を後世の学者に都合の良い入れ物であり、中尾の説明はすべて歴史の事後説明であると、照葉樹林文化論をくさしている。そのような主張をするならば、それに優る現代の科学を反映した説得力のある論考があつてしかるべきであり、活字のエビデンスは正確に引用されなければならない。本書の犯した重大な過ちの一つは、引用文と解釈を識別しない記述である。本書での引用(註を含む)では、『栽培植物と農耕の起源』のどの版(刷

り、中尾は何度か本文を修正している) によるのか定かではないが、文章が底本と微妙に違っており、著者の解釈に合わせて引用文が変えられている。事実かどうか一部について、本書の記述と中尾の底本とを比較してみよう。

1. **本書**：「野生のイネ科の草の粒を採集して食用とすることを知った人々が、サバンナ地帯から離れて、雨量の多い地帯へ入っていくと、そこにいままでの乾燥したサバンナとちがった、多くの食べられる湿生のイネ科植物の自然の群落に出会うことになる。それらの植物の中でとくにすぐれていて、人間によって選びだされ、水田という新しい栽培地で栽培されるようになった雑穀が、すなわちイネである」。したがって、「アフリカとインドの両方にまたがったサバンナ周辺、すなわちその両端であるインド東部と、アフリカのゴールド・コーストに近い西アフリカの両方で別々にイネという作物が開発されたという歴史が当然のこととなる」。

**底本** (岩波)：「・・・野生の禾本科の穀粒を食用とすることを知った人々が、サバンナ地帯から離れて、雨量の多い地帯へ入っていくと、そこにいままでの乾燥したサバンナとちがった、多くの食べられる湿生の禾本科植物の自然の群落に出会うことになる。それらの植物の中でとくにすぐれていて、人間によって選びだされ、水田という新しい栽培地で栽培されるようになった雑穀が、すなわちイネであるというわけである。したがって、アフリカとインドの両方にまたがったサバンナ周辺、すなわちその両端であるインド東部と、アフリカのゴールド・コーストに近い西アフリカの両方で別々にイネという作物が開発されたという歴史が当然のこととなる。」

2. **本書**：また、インドで食用とされている野生の湿地の穀粒の一覧表をあげて、湿地に生じる野生の雑穀の採取利用という食用化の起源と直接結びつくものを求めてみると、それはだんぜんインドにあり、その他の東南アジア諸国からはほとんどこのような例が見いだせないとしている。

**底本**：「・・・、湿地に生じる野生の雑穀をげんざいまで採集利用しているという、イネ食用化の起源と直接結びつくものを求めてみると、それはだんぜんインドにある。つまり、・・・」、この間マコモ *Zizania latifolia* とヒエ *Echinochloa spp.* の記述あり、「・・・、それ以外の東南アジア諸国からはほとんどこのような例が見いだされなことは、・・・」

3. **本書**：「インドで最初にはじまったイネの栽培

はサバンナ農耕文化の雑穀の一部として始まった。しかし、イネは水田栽培という特殊性があって、それは平野水田の形態をとった。イネの品種が陸上で栽培され、オカボとなって品種群をつくるのは、イネが東方へ伝播して、アッサム以東の山地へかかってからである。インドオカボはその地方から豊富に出現してくる」(註1)

「栽培イネが湿熱のビルマの方向へむかって伝播をはじめ。そこにアッサムの山地がある。その山の上は掘り棒をもってイモ類を栽培していた根栽文化の地帯である。彼らはイネという新しい作物を知ると、焼畑の山の斜面でイモを栽培するのと同じやり方で、掘り棒を使ってイネを点播(ばら撒きでなく一定の間隔で数粒ずつまとめて播くこと)する。——ここに焼畑、掘り棒によるオカボの点播栽培という農耕複合が成立してくる」。

「これらの山棲みの焼畑農業は発展とともに、階段耕作の永久畑、永久水田にすすんでくる。段々畑、段々水田はそこで一つのクライマックスとして出現してくる」

**底本**：インドでまず最初にはじまったイネの栽培はサバンナ農耕文化の雑穀の一部としてである。しかしイネは水田栽培という特殊性があって、それは平野水田の形態をとった。イネの品種が陸上で栽培され、オカボとなって品種群をつくるのは、イネが東方へ伝播して、アッサム以東の山地へかかってからである。インドオカボはその地方から豊富に出現してくる」(次の文章まで収穫・調整法の説明あり)

「栽培イネが湿熱のビルマの方向へむかって伝播をはじめ。そこにはアッサムの山地がある。その山の上は掘り棒をもってイモ類を栽培していた根栽文化の地帯である。彼らはイネという新しい作物を知ると、焼畑の山の斜面でイモを栽培するのと同じやり方で、掘り棒を使ってイネを点播する。もちろんそのイネの品種はオカボでなければならない。オカボはもうイネというより、アワ、キビなどの雑穀とほとんど同格の作物である。ここに焼畑、掘り棒によるオカボ(台湾の高砂族では主にアワ)の点播栽培という農耕複合が成立してくる。」(この間にオカボと山棲みの説明あり)

「この山棲みの焼畑農業は発展とともに、階段耕作の永久畑、永久水田にすすんでくる。段々畑、段々水田はそこで一つのクライマックスとして出現してくる。」

1では、底本の文章と同義の「禾本科」が「イネ科」に置き換えられているのは良いとしても、「穀粒を」にあたる部分が「草の粒を採集して」のように意味不明の文章に改竄され(実は直前の文章の一部

を組み込んで穀を脱字)、前後の文章と併せて底本の文章が微妙に書き換えられており、2では、どこからどこまでが中尾佐助の言及か解らない形で、著者の解釈が述べられ、底本の「げんざいまで」が抜かれ、3では、中尾が焼畑でのイネがオカボであると断っていることを、わざわざ抜いて引用文を組み上げている。また、2では、「一覧表をあげて」主張を記述しているとしているが、底本では主張の記述の後に一覧表が示してあり、ここでも脈絡を変えて引用されている。これ以外にも驚くほど多くに「引用」と「著者の解釈」とを識別しない記述がある(例:前川文夫に関わる部分、吉良竜夫に関わる部分など)。

### あまりにも多い誤引用

雑草のクログワイ *Eleocharis dulcis* と栽培のシナクログワイ(オオクログワイ馬蹄 *Eleocharis tuberosa*)、一年生と一年性、起源と起原など、本書では登場する植物種の範疇や用語の概念規定も極めて曖昧である。重要な論点として取り上げているサトイモについても、その学名の綴りを間違っている(本書79ページの *Colocasia esculentum* L. という学名は存在しない。正しくは、*Colocasia esculenta* (L.) Schott であり、基本異名を使うなら *Arum esculentum* L. でなければならない)。186ページには著者の植物に関する知識がそれほどでないか極めて不注意であることを露呈している。「縄文時代の植物の遺物のもっとも一般的なものは、クルミ、トチノキ、クリ、ドングリなど木の実であり、関東以西ではこれにカシおよびシイの実が加わってくる」の記述はそれを示している。「ドングリ」と「カシの実」が同じもの(*Quercus* 属の斗果)であることは、植物を少し知る人なら解る話である。実は、この文章は笠原(1979)の文章を転写・改変した結果である。笠原(1979)の91ページには「縄文期は……、関東以東北では落葉広葉樹林帯のクルミ、トチノキ、クリ、ドングリ、関東以西南の照葉常緑樹林帯ではそのほかにカシ、シイなどが大切な食料であった」とあり、本書の著者は笠原(1979)がドングリとカシという言葉が植生帯に対応して使い分けたのを認識していない。同じ186ページにある「6種の野生イチゴ……、カラスノザンショウ……など、果実や若芽を食べたと考えられるものが多く出土した。また、裸地の雑草であるオニタビラコ、キランソウ……も比較的多く出土したという。」の文章は笠原(1979)の114ページでは「6種の野生イチゴ……、カラスザンショウ……など果実、若芽を食べたと考えられるものが多く出土した。また、アオツヅラフジなどのつる草もあるが、オニタビラコ、キランソウ……も比較的多く出

土した。それらは人里植物であり、カラムシは……」とあり、「カラスノザンショウ」は「カラスザンショウ」の転写ミス、「裸地の雑草である」は「人里植物」に対して笠原(1979)が述べた解釈(原文69ページ)を組み込んで著者が文章を作文した結果である。人里植物は、現代生態学でいう攪乱依存種 *ruderal* (Grime 1984) に対応する沼田眞(1972)の訳語であり、中尾佐助の言葉を借りるなら汚植物(中尾1949)カルデラルプラント(中尾1981)と表現されるもので単純に裸地の雑草ではない。笠原(1979)の原文は、日本雑草学会の設立シンポジウムで発表したものである。講演の際のガリ版刷りの要旨でも配布された説明資料でも未整理で誤植が多かったから、大量の研究成果を紹介するのに笠原自身も不満足な状態で出版したとみられる。本書の引用はそれをさらに改悪している。中尾佐助も笠原安夫も故人である。死人に口なしで、反論者の居ないのを良いことにでたらめに書き綴っているとしか言いようがない。

このように述べだしたらいとまがないほど引用上の不適切が本書にはある。「クワズイモの仲間のイモは、水さらしなど青酸を除く処理をしないと食べられない」とする本書(81ページ:学名の *Alocasia* spp. は *Alocasia* spp. の間違い)の記述は、えぐみとなる蔞酸カルシウムや苦みをとるための水さらしと混乱したか、あるいはキャサバの毒成分の水さらしとを混同していると思える(Bradbury et al. (1995)はクワズイモの根には比較的高い青酸が含まれるとしているが、Lin et al. (1998)はインドクワズイモの人間への有毒成分が蔞酸カルシウムであるとしている)。この本には著者の解釈を付け加えた引用文や信頼に欠ける記述があり、ハトムギの初期の利用が玄米茶であったなど、妄想に近いような記述もある。

本書でも「机上の考えで決めつける」ことをいさめているように(68ページ)、科学は思いつきや想像による説明を排除して成り立つものである。そのような意味では、仮説を補完する科学的事実の記述がでたらめな本書の論考には、先学の説を否定するだけの十分さはない。史前帰化植物や三倍体植物群に関連する東アジア原産の植物に関する現代的知見を反映しない論考とともに、多年生イネの株分け栽培と熱帯アジアでの根栽農耕との関係とはとくに論証不足である。サトイモ(タロ) *Colocasia* 属やヤマイモ(ヤム) *Dioscorea* 属には、根栽農耕圏には熱帯低地適応型(乾燥感応型)と高地適応型(低温感応型)の2群があり(堀田2003)(属内種間差や種内変異群差として)、高地適応型の種類では側枝先端の節間が短縮肥大し塊茎となるが、熱帯低地型では側枝は塊茎を作りにくい。堀田(2003)の先立つ研

究に基づいて照葉樹林文化と根栽農耕文化の発展過程（刺激過程）を逆転させて東アジアの農耕文化の発展段階を構築したいとする後世の中尾の考え（中尾 1982, 1985）や根栽農耕に関する研究は本書では意図的に排除され、サウアー(1981)の根栽農耕の考えを展開するかたちで中尾佐助を悪者に仕立てている。照葉樹林や雨緑林などの植生帯の説明においても機能風土論的な解釈をねじ曲げて持ち出し照葉樹林帯の連続性に疑義をあらわしているが、華南の稲作地帯の周辺の山岳の環境の中に照葉樹林の構成種が多数みられる事実は隠すことはできない（任 1986）。稲作農耕における根栽農耕の役割や照葉樹林の成立を論じるのなら、これらに関する現代的研究は真摯に受け止め、論考に反映されていなければならぬ。

### 事実無根

本書 64 ページには目をむく記述がある（29 ページにも同様の記述）。「はじめ、岩波新書版では、中尾は、麴の発酵酒も稲作もインドの農耕文化に由来するものとして、照葉樹林文化の中に入れなかった。しかし、・・・稲作も麴も、・・・すべて「照葉樹林文化」のなかに入れられた。」。中尾（1966, 1967）は麴の酒については発酵の類型をあげて『栽培植物と農耕の起源』でも「農業起原論」でも照葉樹林文化の見出しのなかで照葉樹林文化の重要な要素としている。上山・渡辺(1985)でも述べているように中尾佐助の著作（著作集全6巻および中尾佐助著述彙編：総合情報センター内部資料）を見る限り、麴の酒をインド文化に関連するとした事実はない。このありもしないことを根拠にして、照葉樹林文化論は、中尾佐助が前説撤回や変更を繰り返して作ったとする記述はいったいどういうことだろうか。また、26 ページには「中尾はイネを直接研究したことはなかった。栽培イネの開発と栽培イネの発達について中尾の述べていることは、・・・盛永俊太郎の「イネの生態型」の仕事と並べ直したものである。」とも述べている。これも事実無根である。中尾佐助は 1959 年にロックフェラー財団の支援のもとでシッキムとアッサムへ野生イネの研究調査に出かけており、その成果は *Seiken Jiho* (1960) に木原均先生と共著の短い報告にまとめている。1960 年 2 月 29 日の毎日新聞には野生イネの調査研究の重要性を掲載している（イネについては大阪府立大学で試作栽培をしており、植物標本を作って研究している。本書評の著者は大学の倉庫の整理のため、中尾佐助作成のイネを含む多数の複本の標本を焼却処分した。重要な標本の一部は京都大学の標本庫などに保存されているはずである）。事実、『栽培植物と農耕の起源』

や「農業起原論」のなかの「イネの開発」の著述で使われた写真は、この時のフィールド探検に基づくものである。直接研究したことはなかったとはおかしな話である。関連の著述をしっかりと読めば、並べ直しだけでないことは明らかである。本書の骨格のなかで、麴酒の問題とこの一文とは中尾佐助の信頼性を落とすための極めて重要な役割を果たしており、虚偽の記述として責任の重い部分である。

私の師、中尾佐助は、噂や学会の趨勢で物事を見てはいなかった。その時々々の学術の事実（活字）と自己のフィールド調査での観察事実に基づいて構想は組み上げられ、修正されていた。常に事実と説明と解釈や想像とは分けており、屋上屋を重ねる議論は避けている。それに比べ、初期の原稿を読んでもらった（あとがき）イネの研究者とともに品種改良を通して近代稲作の指導者であった本書の著者が自己で立てた命題を検証していないだけでなく、周辺の農耕要素についても十分に説明し得ていない本書は、稲作だけでなく農耕の起源を論ずるにはほど遠い存在である。想像と思いつきから始まったとしても、事実に基づかない論考は、科学者としてもっとも恥すべきである。中尾佐助（1981）は、野生タロイモ（サトイモ）は稲作水田にはみられないとして、稲作水田と野生サトイモとの棲み分けが「栽培稲の起原がサトイモ栽培の雑草からおこったという一部の研究者の説に対する反証となる」としている（本書の著者が華南の水田畦畔や溝でみたとするサトイモは、東南アジアだけでなく日本南部や西表でもみられるルデラル型のサトイモであり、イネとは植物群落の組成として強い結びつきを示さず、生態的には棲み分けしているのがふつうである）。野生イネとサトイモとの共存は本書の著者のフィールド調査でも見つかっていない。種子作物であるイネについて株分け移植栽培という、本書の主張の根拠となるエビデンスは、いったいどこにみられるのか？多年生イネの株分け移植栽培がどれだけ持続的な高い生産性を示すのか？それが実証されない限り、原理の中核を保障できないから、サウアーの仮説から一歩も外へ出ないこの書の論考はすべて破綻していることになる。

本書の著者は、あとがきに、本書が批判に耐えられるものでなく、後悔するのではないかと述べている。しかし、一方で多くの論点では先学の見解について、疑いを増幅させる根拠のない文章（実は著者の創作）を付け加えて、誤りを犯したと厳しく批判している。通常、科学論文では、先行研究を批判するのは常であるが、先学の個人を批判はしない。書かれた事実や解釈を批判する。本書は、個人を標的にして事実無根の批判を繰り返し、関連する文献を

深く調べず、あいまいな引用をとまなう稚拙な論考を述べている。理由はどうであれ、先学の学識や行動を意図的改竄あるいは事実誤認で傷つけた以上、本書の著者は責任のある後始末をすべきである。本当に麴の酒をインド文化起源と中尾佐助が書いたのであれば、曖昧な形で述べるのではなく、書かれた出典を示すべきである。本当に中尾佐助がイネを直接研究したことがなかったと思うのなら、その根拠を明確に示すべきである。中尾佐助の著述のすべては、大阪府立大学の図書館に保存されており、初期の手書きの原稿も探検スライドのすべても閲覧出来る。フィールド調査の経験も研究に手がけた植物の種類も確認できる。本書のいう「麴酒のインド起源説」は、中尾佐助著作集に再録されなかった著作(駄作を含む)の中に見つかるかも知れない。検証は至って容易いことである。それは大学での教鞭をとおして若い人々の人格の形成に関わっている(きた)大学人としての責務である。敗退の言も潔い学者の姿である。

#### 編集者の責任

この書籍の罪の責任は出版社にもある。原稿の引用を検証せず、でたらめな文献記述と引用符の使い方の不統一など(序章には前川文夫の文献は使われていない[264 ページ]、僅か2行の羅列のなかに同じサトイモが重複記述されている[91 ページ]、「タロイモ水田」と「タロ水田」と「サトイモ水田」の不統一、『雑草の歴史』(一九八九)という本のなかで[185 ページ]は『雑草の科学』という本の「雑草の歴史」(一九八九)という論文のなかででなければならぬ)など、様々な過ちを看過し、誹謗中傷にあたる文章の公表 publication を容認し、未編集の書籍を出版してしまった編集者は、学術出版に関わるものとして失格である。小見出しと一致しない本文の中味は駆け出しの編集者でもわかるはずである。例え普及書であるとしても、著者の思い入れや過誤による過ちや不整合や誤植を最大限なくし、著者と協働して正しい情報を発信するのが、真の編集人である。もし、「稲作」という言葉で本の売れのみを求めて発行したとすると極めて倫理に欠けた出版社といわざるを得ない。報道や出版の自由は保障されるべきであっても、虚偽の情報の発信は許されるべきでない。虚偽の情報にもとづいた著作で利潤や印税を得るのは犯罪である。講談社選書メチェ(メチャメチャか?)のシリーズの一つである本書は(編集担当からは何の解答も得ていないが、本書の著者によると書籍の回収もまし刷りの停止も内容の改訂もしない方針と聞いている)、代価を払って読む価値のない、選書というにはほど遠い、これま

でない悪書といえよう。このような本は、出版社も責任をとり、すみやかに回収されるべきである。

「いらなくなったら捨てればよい: 選書メチェの刊行の辞」の精神では済まないであろう。誤った情報に基づいたものでも文字を好む読者は活字を信用してしまう(浅香 2007)。怖いことである。

私は、「生命と科学の倫理」という学部2年生の授業において誤引用や循環引用著述の罪を論ずための教材として本書の記述を活用している。

(大阪府立大学 山口裕文)

#### 文献

- Anderson, E. 1949. *Introgressive Hybridization*. Wiley, New York. 1-109.
- 浅香 聡 2007. 「読后感想文 稲作の起源 池橋宏著 『これから出る本』 2007-No7. 15.
- Bradbury, J.H., S.V. Egan and P.J. Matthews. 1995. Cyanide content of the leaves and stems of edible aroids. *Phytochemical Analysis* 6 (5): 268-271.
- Cai, H.W. and H. Morishima 2000. Genomic regions affecting seed shattering and seed dormancy in rice. *Theor. Appl. Genet.* 100: 840-846.
- Grime J.P. 1979. *Plant Strategies and Vegetation Processes*. Wiley.
- Kihara H. and S. Nakao 1960. The rice plant in Sikkim - a report of the scientific mission. *Seiken Jiho* 11:46-54.
- 堀田 満 2003. 「根栽農耕で利用される「イモ型」植物」『イモとヒト』 9-31. 平凡社
- 堀田 満 2004. 「解説 中尾佐助・農耕起源論の成立過程」『中尾佐助著作集 I 農耕の起源と栽培植物』 709-730. 北海道大学図書刊行会
- 笠原安夫 1979. 「雑草の歴史」『雑草の科学』 69-135. 研成社
- 任美鏐 1985. 『中国の自然地理』 東京大学出版会. (阿部治平・駒井正一訳)
- Lin, T.J., D.Z. Hung, W.H. Hu, D.Y. Yang, T.C. Wu, and J.F. Deng 1998. Calcium oxalate is the main toxic component in clinical presentations of *Alocasia macrorrhiza* (L.) Schott and Endl. poisonings. *Veterinary and Human Toxicology* 40 (2): 93-95.
- Lin, Z., M.F. Griffith, X. Li, Z. Zhu, L. Tan, Y. Fu, W. Zhang, X. Wang, D. Xie and C. Sun. 2006. Origin of seed shattering in rice (*Oryza sativa* L.). *Planta* DOI 10.1007/s00425-006-0460-4
- Londo, J.P., Y-C. Chiang, K.H. Hung, T.Y. Chiang,

- and B.A. Schaal 2006. Phylogeography of Asian wild rice, *Oryza rufipogon*, reveals multiple independent domestications of cultivated rice, *Oryza sativa*. Proc. Nat. Acad. Sci. U.S.A. 103 (25): 9578-9583.
- 松尾孝嶺 1974. 『育種学ハンドブック』 養賢堂
- 中川原捷洋 1985. 『稲と稲作のふるさと』 古今書院
- 中尾佐助 1949. 作物と雑草 人文地理 1(3):27-32.
- 中尾佐助 1960. 稲の祖先をさぐる — 貴重な原始「野生稲」北インド、アッサムで発見 毎日新聞 大阪版・朝刊 1960.2.29.
- 中尾佐助 1966. 『栽培植物と農耕の起源』 岩波新書(青版 583) pp.192. 岩波書店
- 中尾佐助 1967. 「農業起原論」 『自然——生態学的研究(今西錦司博士還暦記念論文集1)』 329-494. 中央公論社
- 中尾佐助 1976. 『栽培植物の世界』 自然選書 中央公論社
- 中尾佐助 1977a. 「半栽培という段階について」 『どるめん』 No.13 : 6-14.
- 中尾佐助 1977b. 「栽培からの脱出雑草」 『週刊朝日百科 世界の植物』 95:3210-3213.
- 中尾佐助 1980. 「東南アジア農耕文化試論」 『東南アジアの農村における果樹を中心とした植物利用の生態学的研究』 82-97.
- 中尾佐助 1981. 「タローイモの起原と文化」 『育種学最近の進歩』 22 : 75-85.
- 中尾佐助 1982. 「パプアニューギニアにおける半栽培植物群について」 『東南アジアおよびオセアニアの農村における果樹を中心とした植物利用の生態学的研究』 7-19.
- 中尾佐助 1983. 「東アジアの農耕とムギ」 『日本農耕文化の源流——日本文化の原像を求めて(佐々木高明編)』 122-148. NHK出版
- 中尾佐助 2004-2006. 『中尾佐助著作集全6巻』 北海道大学出版会(図書刊行会)
- 中尾佐助 2005. 「第VI部 分類の道具でみた論文と本」、『中尾佐助著作集 第V巻 分類の発想』、695-778. 北海道大学図書刊行会
- 中尾佐助・上山春平 1982. 『日本文化の系譜——照葉樹林文化とその周辺』
- 沼田 眞 1972. 『植物たちの生』 岩波新書
- 佐々木高明 2006. 「解説 照葉樹林文化論——中尾佐助の未完の大仮説——」 『中尾佐助著作集 VI 照葉樹林文化論』 763-792. 北海道大学出版会
- 佐藤洋一郎 1996. 『DNAが語る稲作文明 起源と展開』 NHK ブックス
- 佐藤洋一郎 1999. 『DNA考古学』 東洋書店
- サウアー C.O. 1981. 『農業の起原』 竹内常行・斉藤晃吉訳 古今書院 (原書は1952年)
- 上山春平・渡部忠世 1985. 『稲作文化——照葉樹林文化の展開』 中公新書 752.
- 2007年11月3日 照葉樹林文化研究会2007(於大阪府立大学)で発表**
- 注:2007年8月10日づけで講談社出版局からは「ご指摘につきましては、小社のしかるべき部局に報告の上、検討しております。」との、引用ミスを認めた回答を得ているが、検討の結果は知らされていない(2008年1月現在)